

青年期における人格形成と 精神的健康に関する研究 (IV)

——性役割尺度再考——

井上知子 三川俊樹 芳田茂樹*

A Study of Personality Formation
and Mental Health in Adolescence (IV):
——Reconsideration of Gender Role Scale——

Tomoko INOUE, Toshiki MIKAWA & Shigeki YOSHIDA

1987年から、青年期における人格形成と精神的健康に関して、まず文献的に検討を行ない、1989年には実証的研究のための測度として、性役割と自我同一性を設定し、それらの尺度を作成、報告した(井上他 1989, 三川他 1989)。本年度は、性役割尺度、自我同一性尺度に、さらに既存の価値観尺度を使用して調査を実施し、それらの関連から青年期の人格形成を検討した結果について、(Ⅲ)に報告をしたところであるが、本稿では、2年間集積した資料をもとにして、性役割尺度に関して、妥当性を中心に尺度の有効性について考察していく。

1. 文献による性役割の測定再考

——Ashmore, R. D. (1990) の提案を中心にして——

性役割の概念と測定については、すでに文献によりかなり包括的に展望し検討をした(井上 1987)。その結果、1973年になされた Constantinople, A. による従来の M-F スケールへの批判と、Bem, S. L. (1974) による心理的両性性の概念の提案および新しい性役割スケールの開発は、性役割の実証的研究分野に新しい展開をもたらし、約10年間に非常に数多くの研究成果が報告されることになった。しかし、このように急速な研究の結果はまた種々の点で混乱と不一致という問題も露呈し再検討すべきいくつかの点があることを指摘しえた。すなわち、

* 大手前女子短期大学

次の3点である。

1. 心理的両性性の概念こそ精神的健康の理想状態であると主張しつつ、両性性とは、いかなる状態を示すかその概念定義が明確になされていず、さらに心理的両性性に達している場合、生活においていかに機能するかがあいまいである。
2. 心理的両性性を測定する尺度作成において、「両性性とは男性性スコアと女性性スコアとがともに高得点である」ことにより示されるという操作的定義はほぼどのスケールでも一致しているが、項目選定方法については、自己評定法によるもの、ステレオティピカルな考え方によるもの、理想的性役割観によるもの、など各スケールにより異なっている。そのため、各スケールにより測定された結果に矛盾がみられる。
3. 性役割に関する研究は、パーソナリティ研究の中に含まれるべきものであるにもかかわらず、心理的両性性研究の中心はパーソナリティ研究とはかけはなれており、理論的方向づけもしにくくなっている。

これらの問題点を認識した上で、我々は新しい尺度の作成にとりかかったが、Ashmore, R. D. (1990) は Pervin, L. A. 編集の *Handbook of Personality* の 19 章において、Sex, Gender and Individual のタイトルで、1989 年までの研究を通観し、上で指摘したと同様の問題点をあげ、それらの考察を行なった。そこで、次に Ashmore の論を述べ、我々の指摘と併せて考察し、1989 年に新しく作成した性役割スケールについて検討してみよう。

Ashmore は性 (sex and gender) に関する研究について、1894 年に出版された Ellis, H. の *Man and Woman* から、1989 年の Eagly, A. H. らの一連の論文まで、約 100 年間の研究の流れを 6 段階に区切り、まずその特徴を説明した。

6 期は、1894—1936：知能の性差、1936—1954：包括的な性格特性としての男子性—女子性、1954—1966：性役割の発達、1966—1974：性別化の総括的な新理論、1974—1982：理想的な性役割としての両性性、1982—現在：社会的カテゴリーとしての性、であるが、この中で 5 期と 6 期とが特に注目に値する。

1974 年、Bem が新しい概念である両性性という心理的な用語を導入したことにより、それまでの性役割研究に大転回が生じた。と同時に 1974 年には性差に関しても Maccoby, E. E. と Jacklin, C. N. が *The Psychology of Sex Differences* を出版し、それまで大きい違いがあると一般的に考えられていた性差の存在は実際には小さいものであると結論づけた。

これら、性役割および性差についての新しい考え方は急速に多くの研究者に受けいれられていったが、1982 年 Sherif, C. W. が *Needed Concepts in the Study of Gender Identity* と題する論文を発表したことにより、6 期になっていった。Sherif は「性 (sex & gender) に関する心理学的分析をするには gender が社会的なカテゴリー体系であるということを認識しておく必要がある」と主張した。この Sherif の主張によりその後の性役割の図式に大きな

変換が生じ、また男女間の大きな差異の存在も示されるようになった。

性役割および性差の研究を時代とともに概観した結果、Ashmore は結論として、3つの基本的な分野、すなわち性差 (sex difference)、パーソナリティの変数としての性 (gender as a personality)、と社会的カテゴリーとしての性 (sex as a social category) の研究があることを示唆している。続いて、これら3分野について順に論議しているが、ここでは特にパーソナリティ変数としてのジェンダーと社会的カテゴリーとしてのセックスに関する論議が、上述の我々の指摘した問題点の解明に大きな示唆を与えるものと思えるので簡単に紹介する。

1974 年、両性性研究の時代が到来したが、その中心的な研究者は Bem, S. L. と Spence, J. T. であった。彼女らの研究の主要な点は4つある。

1. 男性性と女性性はパーソナリティ特性についての自己報告により評価される。
2. 男性性と女性性は連続的な単次元の両極ではなく、別個の独立のものである。
3. 男性性と女性性は（社会的レベルでの性から個人へ）外面的なものから内面的なものを決定しようとする。すなわち男性性は男性が自分達が考え、感じ、行動するだろうと報告するもので女性よりも多いものを意味し、女性性も女性についての同様のものである。そこで女性性と男性性とは社会的な理想像および社会的期待であると定義しよう。
4. 過去の研究者とは対照的に、Bem や Spence らは性別化されている人が健康であるとは考えなかった。

Bem は従来の男らしさ、女らしさの考え方は個人を限定し、制限するものであるとみなし、新しい文化的な理想像として心理的両性性の概念を提唱した。すなわち彼女は、個人の中には男性性と女性性とがあり、その相方の均衡化の程度によって、個々の性別化されたパーソナリティとなると考えた。それ故に状況に応じて男性的あるいは女性的に行動することが可能な融通性をもつことにより、心理学的により適応的になりうるといえる。

Bem は両性性を測定する尺度として BSRI を作成したが、Spence らがその後実証的操作的に再定義し、M スコア、F スコアともに高得点を両性性というべきであると主張し、Bem もこの考えをうけ入れた。このような経過から Ashmore は、両性性の意味に関して次の4つの問題点を指摘している。① 両性性の構成要素について完全な再評価が行なわれてはいない、② 「未分化」という新しい概念が考え出されたが、理論的にはまったく分析、検討されていない。③ 性役割4タイプの分類が粗く、多くのデータがどのタイプへも分類されないで捨てられる、④ 「両性性も男性性と女性性との1つの特殊な組み合わせではないか」という疑問に答えていない。

これらの指摘をもとに、Ashmore は M, F の各下位尺度の内容、両尺度の関係について検討した。F および M の特性測定はかつて「操作的」と「表出的」あるいは「作動的」と「共同的」と呼称されたパーソナリティ布置の一対に関連するという研究結果がいくつかある。

これらの結果は M と F 尺度の妥当性を示してもいるが、「男性的である」、「女性的である」という特性について混乱もひきおこした。BSRI についての反応を因子分析した研究結果は、「男性的」と「女性的」とは他の操作的項目および表出的項目ともに負荷せず、それら自身が両極の因子を形づくることを示している。これに関する討議から男性性と女性性との関係については今後の主要な解決されるべき課題であるといえる。

男性性、女性性および両性性と心理的適応および精神的健康との関連について研究がなされていることも指摘されている。

Bem も Spence も 1980 年代になり別の問題に研究を移行させていた。1981 年 Bem は新しい概念として“gender schema”を提案した。一方、Spence は性役割的な現象についての多角的な観点へと関心をかえていった。Bem のいう gender schema とは、男、女を区別する社会の事象についての非常に広く多い知識を体系化する認知的構成物である。この Bem の仮説的提案はそれ以後検討されている段階である。Spence の研究も今後の検討が必要な状態であるが、いずれも性的同一性により広い視野が必要であることを示すものといえよう。

Ashmore らはパーソナリティ変数としての性について内容の問題とプロセスの問題に分けて展望している。内容の問題に関して今までの批判は 4 つにまとめられると言及する。まず、最初には本質論というべきものであり、男性性と女性性とは個人の中に明らかな同一性を形づくる本質的なものなのかという問題である。多くの研究者は男性性、女性性、両性性は自己記述によって十分にとらえうると仮定している。しかし、セックスとジェンダーは個人の自己の中に、非常に複雑でしかもあまり互いに関係づけえぬ方法で組み込まれていることが判っており、研究は男性性と女性性の相互関係についてよりは、むしろパーソナリティ特性として扱うべき方向へいくことになるであろうと示唆する。次は今までの研究では社会的文脈および人生の段階との関連で考察しえていないという問題である。どんな理論においても、男性性と女性性は児童期までに文化の中で習得すると仮定しているが、人の一生という中では考えられていない。第 3 としては、ほとんどの性役割形成についての研究で、個々の人間は生得的遺伝的要因かあるいは社会的要因に入れられ無視されていることがあげられる。最後に指摘されるのは理論の過度の単純化である。

一方、プロセスにおける批判点としては、第 1 にパーソナリティ変数としての性の研究はあまりに静的、非発達のな方法であり、性役割の意味に対する原因の関係が論じられていないこと、および第 2 として、結果に対する性役割の意味の関連も明確にされていないことがあげられる。

Ashmore はさらに論を進め、セックス、ジェンダーと個人に対するもう一つの主要なアプローチは包括的なパーソナリティの構成体としてのジェンダーとか、平均的な性差ではなく、社会的カテゴリーとしてのセックスに焦点をあわせた研究が、1980 年代以降みられるように

なったこと、およびこの視点からの研究は、個人を社会的な文脈との関連の中でいかに上手に概念化し、研究するかであるが、現在のところうまく明確に表現されしかも完全に研究されたものにはなっていないと指摘している。

性的同一性 (gender identity) の多重性モデルについて研究することは、先に述べた両性の性的役割について指摘された種々の問題点を解明するために重要であると思われるが、この問題は本稿の目的とは論を異にするものであるので、次に検討する課題として保留することにする。

2. 性役割尺度 (1989 年版) についての検討

昨年度、我々の作成した性役割尺度についてはすでに報告したが (三川他)、作成にあたり従来の問題点を解決すべく考慮した主要点がいくつかあった。次にそれらを簡単に述べてみよう。

まずあげられることは、我々は項目源として、Bem の BSRI、Spence の PAQ およびいくつかの日本で作成された尺度から重複するものを省いた 97 項目を被験者に呈示したということである。Bem や Spence はアメリカの文化の中で作成したものであるから、そのまま日本で使用することは不可能であるのは当然であるが、全然使用不可能ともいえず適切なものを選定する必要がある。さらに今まですでに日本で作成された尺度はステレオティピカルな男性性、女性性を肯定しそれに基づいて項目が選ばれているものが多く、ステレオティピカルな男性性、女性性が現在の社会の中にそのまま通用するものか否かの検討が必要となる。

そこで、我々は男女大学生を対象として 97 項目について、どの程度自分にあてはまるかを、「非常によくあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」までの 5 段階で自己評定させることにより反応させた。従来の反応収集には、理想的と思われる男らしさ、女らしさについての評定、その文化で典型的と思われる男らしさ、女らしさの評定などもある。しかし、我々の研究の主目的は青年期における人格形成と精神的健康との関連について検討することであり、そのための一つの用具として性役割尺度が作成されたのである。それ故青年が自己の中に意識的に把握している特性こそが重要であり、自己評定による特性は、その文化で典型的な特性や望ましいとみなされる理想像と重なり合わない部分の方が大きいものと思われる。そこから自己評定による反応の収集という点が第 2 の特徴であった。また大学生を対象にしたのは、青年期後期にあたり、従来の研究結果から性役割観はすでに形成されており、性役割同一性もかなりの比率で確立されていることが明らかであることによった。

第 3 の考慮点は、男性性予備尺度および女性性予備尺度の項目選定にある。先述の 97 項目に対する反応について、男女別に平均値と標準偏差を算出し、各項目毎に平均値の差の検定を

行ない性差を検討した。項目群は男子の平均が女子の平均より高い項目群、女子の平均が男子の平均より高い項目群と、男女に差のない項目群にわけられたが、性差の大きい順に各 30 項目を選び、前者を「性役割男性性予備尺度」、第 2 群の 30 項目を「性役割女性性予備尺度」とした。ここで除外した第 3 の項目群には、男女ともに自分に「あてはまる」と反応した項目と、逆に「あてはまらない」と反応した項目とが含まれている。特性について男女ともにあてはまると自己評定した項目は、性役割特性というよりはむしろパーソナリティの他の特性であると考えられ、BSRI における社会的望ましさの項目、あるいは PAQ の M-F 尺度に対応するものと考えられるので性役割尺度からは除外した。

次に男女 90 名ずつ合計 180 名のデータを用いて、「性役割男性性予備尺度」および「性役割女性性予備尺度」の因子分析を行なった。その結果、両尺度ともに 2 因子抽出され、男性の性役割は、「男性統合性」および「男性典型性」と命名される 2 因子で構成され、女性の性役割は、「女性統合性」および「女性典型性」と命名される 2 因子で構成されていることが示された。これらの結果に基づいて、「男性性予備尺度」および「女性性予備尺度」ともに、各因子ごとに因子負荷量の高い方から順に 10 項目を採択し、性役割尺度を作成した。従来の性役割尺度が男性性と女性性の 2 下位尺度から構成されていたのに対して、男性性 2 因子、女性性 2 因子の 4 下位尺度から成るところが、我々の尺度のもっとも大きな特徴である。

これら 4 因子の関係について統計的に検討した結果は、表 1 および表 2 に示した。これらの詳細な検討についてはすでに報告したが（三川他）、要約すると次のようになる。すなわち、統合性の次元においては男女とも「男性統合性」および「女性統合性」についてかなり共通する内容をもつが、両者は同一のものではなく、それぞれに異なる側面を併せもっている。典型性の次元においては、「男性典型性」と「女性典型性」とは互いに相反する内容をもつものとみなされる。男子においては、「男性統合性」は、「男性典型性」および「女性典型性」とは別の次元に独立しており、「男性統合性」の獲得には「女性典型性」の獲得を必要としない。一方、女子においては「女性統合性」は「女性典型性」とは別の次元にあるが、「男性典型性」とは密接な関連をもっており、「女性統合性」の達成に「男性典型性」の獲得が重要であると考えられたのである。

表 1 性役割尺度の平均とSDおよび性差（三川他1989より）

尺 度	男子 (N=91)		女子 (N=214)
1. 男性統合性	35.77 (5.46)	>>	33.63 (5.06)
2. 男性典型性	31.36 (5.93)	>>>	29.03 (5.37)
3. 女性統合性	32.05 (6.10)	<	33.79 (5.99)
4. 女性典型性	34.51 (5.13)	<<<	37.01 (4.92)

<: $p < .05$, <<: $p < .01$, <<<: $p < .001$.

表 2 - 1 性役割尺度の相関（男子，N=91）

尺 度	男性統合性	男性典型性	女性統合性	女性典型性
1. 男性統合性		.1831	.4658**	.0696
2. 男性典型性			.5032**	-.3061**
3. 女性統合性				.0033
4. 女性典型性				

** : $p < .01$ （三川他1989より）

表 2 - 2 性役割尺度の相関（女子，N=214）

尺 度	男性統合性	男性典型性	女性統合性	女性典型性
1. 男性統合性		.2424**	.6145**	.0788
2. 男性典型性			.5793**	-.1934**
3. 女性統合性				.0612
4. 女性典型性				

** : $p < .01$ （三川他1989より）

このように仮説的に考案された4因子の関係について、さらに検討するため、前出論文（三川他，報告Ⅲ）において収集したデータについて、(Ⅲ)で分析に用いた男子80名，女子80名の計160名の性役割尺度40項目について因子分析した結果が表3に示されている。項目間相関をピアソンの相関係数により算出し、主因子法によって因子を抽出した結果，第3因子と第4因子の間で，固有値に大きな隔たりが認められた。そこで3因子群にバリマックス回転を行なった結果である。この表から，第1因子には16項目が包まれており，その内9項目が「男性統合性」の項目，5項目が「女性統合性」の項目，のこりの2項目が「女性典型性」の項目である。次に第2因子にも16項目が高い負荷量を示しており，10項目が「男性典型性」項目，5項目が「女性統合性」項目で1項目「男性統合性」が包まれている。第3因子は7項目に高い負荷が示され，すべて「女性典型性」の項目である。さらに項目16（傷つきやすい）はどの因子にも高い負荷量を示さなかった。

この因子分析の結果が意味するものはどのようなものであろうか。

一つの解釈方法としては，性役割尺度を新たに3因子から構成されるものとして考慮しなおすことが考えられる。しかし第1因子および第2因子の項目内容を検討すると，先述の4因子間の関係を支持する結果を読みとることができる。すなわち，男性統合性と女性統合性はかなり共通する内容をもつが同一ではないことから，第1因子が「男性統合性」9項目と「女性統合性」5項目により構成されているものといえる。しかも「女性統合性」5項目は，「感謝の気持ちをもつ」，「積極的である」，「社交的である」，「人に献身的である」，「人の気持ちに気づく」であり，他者とのかかわりの中での特性である。さらに「女性典型性」のうち，「感情的である」，「すぐに泣く」の2項目も加わっているが，これの意味づけはここでは行ないえない。

表3 性役割尺度の因子分析結果 (N=160)

No	項目内容	F 1	F 2	F 3	h ²
1.	思いやりがある	.6040	-.1247	.0418	.3821
2.	臆病でない	.2458	-.5971	-.1463	.4384
3.	陽気である	.3551	-.4862	.0427	.3643
4.	嫉妬深い	-.1195	-.0068	.7038	.5096
5.	誠意がある	.6957	-.1282	-.0163	.5007
6.	仕事の手腕がある	.1350	-.4499	-.2520	.2841
7.	活動的である	.2950	-.5439	-.0995	.3927
8.	感情的である	.5804	.0636	.3179	.4420
9.	良心的である	.8059	-.0489	.0316	.6528
10.	容易に決断が下せる	-.1524	-.6205	.0245	.4088
11.	友好的である	.3885	-.5122	-.1830	.4467
12.	すぐに泣く	.5330	.0341	.3639	.4177
13.	やさしい	.4182	-.0952	-.1403	.2036
14.	男性的である	-.0040	-.6148	-.1210	.3926
15.	社交的である	.5196	-.3282	-.0870	.3852
16.	傷つきやすい	-.0189	-.0002	.1564	.0248
17.	親切である	.4476	.2430	-.2996	.3491
18.	人の影響を受けにくい	-.3031	-.5075	.2567	.4153
19.	力強い	.0199	-.7668	.1088	.6003
20.	安心を求める	-.1947	-.2214	.5756	.4182
21.	温厚である	.7777	-.0627	-.1754	.6395
22.	自分に自信がある	.0457	-.5703	-.1082	.3390
23.	頼りになる	.2123	-.7385	.0830	.5974
24.	人に認めてもらいたい	.0126	.4018	.4781	.3902
25.	正直である	.6776	.0311	-.2252	.5109
26.	支配的である	.0871	-.3908	-.3645	.2931
27.	人に献身的である	.5185	.0084	.1302	.2859
28.	重大な危機に動揺する	.0699	-.0233	.5559	.3145
29.	知的である	.7884	-.1507	.0086	.6444
30.	少しぐらいのことでは動じない	.0445	-.5215	-.3407	.3901
31.	感謝の気持ちをもつ	.6675	-.1604	.0301	.4721
32.	同情的である	.1522	.2091	.6237	.4559
33.	話し方がおだやかである	.3245	-.1575	-.2535	.1943
34.	自分の信念を曲げない	.3205	-.5586	.0022	.4147
35.	積極的である	.5926	-.1876	.1241	.4018
36.	傷ついた心をなぐさめたくなる	.0851	.1137	.5539	.3270
37.	きれい好きである	.2765	-.3505	.0724	.2045
38.	個性が強い	-.0444	-.6214	-.1095	.4001
39.	人の気持ちに気づく	.5153	-.5028	.1166	.5319
40.	計画性がない	.1797	.1115	.4796	.2747
寄与率 (%)		17.01	14.85	8.42	40.28

一方、「女性統合性」は男女ともに「男性典型性」とも密接な関連をもっていることが示されていた。第2因子は「男性典型性」10項目、「女性統合性」5項目から主に構成されていることは上述のあらわれとみなすことができる。しかも「女性統合性」の5項目とは実際には「陽気である」、「活動的である」、「友好的である」、「力強い」、「頼りになる」であり、性役割

表 4-1 性役割統合性の因子分析結果 (N=160)

項目	F 1	F 2	h ²
1	.5239	.2698	.3472
3	.1622	.7137	.5357
5	.6840	.2485	.5296
7	.1726	.5527	.3353
9	.7717	.1556	.6197
11	.3206	.4786	.3319
13	.4745	.1692	.2538
15	.3376	.6163	.4938
17	.5672	-.2325	.3758
19	-.1352	.8231	.6957
21	.7668	.2356	.6434
23	.0578	.8355	.7015
25	.6383	.1834	.4410
27	.5044	-.0069	.2545
29	.7608	.2847	.6599
31	.6406	.2326	.4645
33	.3553	.1239	.1416
35	.5142	.2758	.3404
37	.1782	.3641	.1643
39	.3130	.7204	.6169
寄与率 (%)	24.69	20.04	44.73

表 4-2 性役割典型性の因子分析結果 (N=160)

項目	F 1	F 2	h ²
2	.6856	-.0208	.4704
4	.0029	.7300	.5329
6	.5901	-.1099	.3603
8	-.0307	.4137	.1721
10	.6323	.0714	.4049
12	-.0118	.4262	.1818
14	.6906	.0019	.4769
16	-.0540	.0866	.0104
18	.4835	.3033	.3257
20	.1236	.5474	.3150
22	.4335	-.1448	.2089
24	-.4942	.3580	.3724
26	.5678	-.2674	.3939
28	.0478	.5944	.3556
30	.6624	-.2521	.5023
32	-.1913	.6718	.4879
34	.6018	.1536	.3857
36	-.1237	.5600	.3289
38	.6040	-.1096	.3768
40	-.1253	.4640	.2310
寄与率 (%)	19.69	14.78	34.47

の作動的特性とみなしうるものである。なお第2因子に「男性統合性」の「きれい好きである」1項目が含まれるが、因子負荷量も他に比較すると小さく、ここでは意味づけしないままにする。

性役割が4因子から構成されるものであるか否かをさらに検討するため、次に同一のデータにより「男性統合性」10項目と「女性統合性」10項目をあわせた20項目、および「男性典型性」10項目と「女性典型性」10項目とをあわせた20項目について、別個に因子分析を行なった(表4-1、表4-2)。これらの結果から、項目に若干の移動はあるが、統合性、典型性ともに2因子あることが立証されており、性役割尺度が4因子から構成されているということは実証しえたものと考えられる。具体的な項目内容については、さらに分析検討する必要があるが、特に、「16、傷つきやすい」はいずれの因子分析においても、どの因子でも低い因子負荷量しか示さず、早急により適切な項目と入れかえる必要があるものと思われる。またこの性役割尺度項目の中に「男性的である」という項目は含まれているが、「女性的である」という項目は1989年度の尺度作成時に項目として選定する基準に達せず含まれていない。Ashmoreの指摘にもあったように、「男性的である」、「女性的である」という項目が他の性役割項目とは別に考えるほうがよりよいとするなら、「男性的である」だけを含むべきか否かも再度検討する必要があるものといえよう。

さらに、男子と女子では、性役割の4因子間の関連に相違があることが、表2より明らかで

青年期における人格形成と精神的健康に関する研究（Ⅳ）

あり、男女別に因子分析を行ない検討してみることも必要である。

性役割は、自我同一性地位とも価値観とも関連があることが前掲の三川他の（Ⅲ）において報告されているが、パーソナリティの変数として性役割を解明するためにも、それらの関連の意味を考察することが肝要である。

文 献

- Ashmore, R. D. 1990 Sex, Gender, and the Individual. in Pervin, L. A. (ed) 1990 *Handbook of Personality: Theory and Research*, The Guilford Press
- Bem, S. L. 1974 The measurement of pshchological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 165-172.
- 井上知子 1987 性役割の概念と測定について 追手門学院大学 20 周年記念論集—文学部篇 17-27.
- 井上知子, 三川俊樹, 芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究（Ⅰ）——研究方法に関する文献展望——追手門学院大学文学部紀要, 23, 1-17.
- 三川俊樹, 井上知子, 芳田茂樹 1989 青年期における人格形成と精神的健康に関する研究（Ⅱ）——自我同一性地位および性役割の測定——追手門学院大学文学部紀要, 23, 19-36.